

と再会をはたした母も、弟の看護に全力を注ぎ、再会後二十日余りののち亡くなってしまった。昭代さんは、弟と生きるため、引き揚げるまでいろいろ仕事を見過つけ、働いた。

八月に入り、帰国準備が開始され、同年代の少年たちが呼び出され、中国に残るよう話され、残ることに返事をしたが、収容所の古老の話を聞くに及んで日本に引き揚げることを決断した、十三歳の昭代さんであった。文学少女ながら、思慮分別をわきまえた昭代さんは現在、幸せな生活を送っている。

(徳引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

命ありて

東京都 田中房春

一、王道楽土を求めて

満州開拓に参加

昭和十三年十二月十日、東京から直行して、満州新京駅に降り立った三人の青年がいた。

寒いとは聞いていたが、初めて体験する零下一〇度の出迎えには、さすがに身震いした。それでも、青年たちの意気は軒昂たるものがあつた。彼らには、大いなる希望があつたのだ。

年長の岡本雅生は三十二歳、小学校の教師を辞し、河野治良二十八歳、田中房春二十四歳で、共に逓信省簡易保険局事務員を辞めて、満州拓殖公社々員として着任してきたのであつた。

昭和七年三月、満州国の成立により、五族協和の王道楽土建設を目指し、満州の農業開発が始まつた。満

拓公社は、開拓用地の取得、整備、開拓団の建設、開拓民の受け入れ、営農の指導など開拓団の定着育成に挺身してきたが、終戦時、その事業所は新京本社をはじめ、全滿各地に支社十三、出張所六十を配置し、社員は四千人を擁していた。

私は当初、本社で青年義勇隊の業務を担当し、昭和十六年北安、同十八年興安地方事務所勤務した。本社時代に結婚し、長女は北安、二女を興安で儲けた。

二、敗戦

応召

昭和二十年五月十二日の夜明け、私は極秘応召のため、一人で興安駅を出発した。昨夜、社宅の人たちが内密で壮行会を開いてくれたが、軍歌も万歳三唱もない静かなものであった。長女雅子は三歳、二女元子はまだ五カ月、父が出征するの知らず、すやすやと眠っていた。私は代わる代わるそっと頬ずりして別れを告げた。まだ日本が負けるなどとは夢にも思われていない時であったから、「すぐに帰ってくるよ」と軽く言っ、門口で一人手を振る妻に笑顔でこたえたので

あった。

白城子と昂々溪こうそうけいで乗り換え、大興安嶺の麓に近い免渡河めんたがの部隊に入営した。

陣地構築

初年兵教育は、ご多分にもれず厳しいものであった。時に私は三十一歳、応召兵のほとんどは同年輩で二十人ぐらいの中隊仲間がいた。先任兵は二十歳から二十三歳ぐらいだから、感情的には違和感がある。内務班でのスリッパのビンタなどは日常のこと。軍隊とは上から下への一方通行で、絶対に逆流は許されないところである。

不思議なことに、小銃は与えられず、射撃訓練はない。専ら爆雷を抱いて匍匐前進をし、敵の戦車の下に突っ込む訓練ばかりだ。これでは実際に敵と交戦すれば、戦死は間違いない。二カ月近い基礎訓練の後、突然、山中の陣地構築に移った。それからは毎日がシャベルとモッコの泥との戦いであった。

食事は七・三の高梁飯だが、連日の重労働で、皆腹を空かした。軍馬用の豆粕の屑を拾って食べたことも

あった。

八月九日、ソ連参戦で陣地は急に慌ただしくなった。全滿の各方面からソ連軍が侵入し始めたという。我が部隊は、この未完成の陣地を捨て、別の山岳地帯の地下壕陣地に入り、そこで要撃することとなった。

敗走

三日たち、五日たった八月十六日午後三時、時ならぬ伝令がもたらしたのは、あの悲痛な終戦の連絡であった。

泣いた、皆泣いた、また号泣した。泣き疲れて、その夜は静かに語り合った。これから日本はどうなるのである。仕事はどうなるのか。そして家族はどうしているのだろうか、とちりり頭によぎるものがあった。

「今まで日本は、皇国史観によつて、八紘一宇の世界に君臨しようとしたが、これからは武力を捨て、文化をもつて平和な世界の実現に貢献することが使命ではなかるるか」と話したところ、「田中、生意気言うな」とある下士官がどなっていたが、私は固く胸に秘

するものがあつた。武器を捨て、「昂々深に集結せよ」との上部からの命令である。ソ連に投降せよとは言われていない。

鉄道も幹線道路もソ連軍に占領されている。このこと出ていくわけにはいかない。そこで大興安嶺を越えて、嫩江^{ぬえい}方面に出ることとなった。前人未踏の大興安嶺である。太古のままの森林もある。それでも道なき道を肅々と歩き続けた。腐った倒木が幾重にも重なつて、綿のようになつている。一度足を踏み入れると、ズボツと腰まで沈む。夜は狼がうろろするので、小さな松明を振り回しながら歩く。

茸も採つた。野生のニラにも恵まれた。小川では手榴弾を投げ込んでたくさんの魚も捕つた。五日間かかつて一人の落伍者もなく、ようやく山越えに成功した。

部落らしいところに出て、有り難いことに一頭の牛に出会い、早速、河原で解体して塩で煮たが、何とゴムをかむように固い。それでも、隊員はがつがつ食べて胃が痛くなつたりした。行軍の途中、畑に残された拳大^{こぶし}の西瓜を集めたり、指先ほどの青いトマトをもぎ

取りむしやぶり食べて、気分が悪くなる者も出る始末である。

人里に出て二日ぐらいから、隊員に動揺の色が現れ始めた。この先、日本軍はすべてソ連軍の捕虜になっているという情報である。特に年輩の応召者の中には、このまま嫩江方面に向かうのを止め、西方の扎蘭屯きつらん屯に行きたいという者があり、ひそかに既に実行に移した者もいるという。しかし、隊の幹部は、日本軍は今、移動はしているが、まだ軍律はある。破るものは厳罰にすると厳しく警戒し出した。

私もひそかに考えた。ソ連軍の捕虜になるのは嫌だ。興安に残した社員や家族たちの安否も気になる。できればこの手で救出したい。だが扎蘭屯方面は危険だ。嫩江方面なら多くの開拓団がある。そこを拠点にすれば何とかなるかもしれない。それまで自重しよう、と。そして決断の時がきた。部落に出て五日目、周囲は開拓地である。「今だ」かねて足の故障を訴えていたので、行軍の隊列から徐々に遅れ、ようやく隊列が見えなくなつたとき、とつさに横の高梁畑に飛び込んだ

のであつた。

開拓地は第十次六間房開拓団である。夜に入つて藤森団長宅を訪れ、私が満拓社員であることを告げ、事情を話すと、快く承諾してくださり、一切の軍装を脱いで風呂場で焼き、団長が内地の教員時代に着ておられた服を頂戴ただした。団長は一メートル九十ほどの偉丈夫であるから、その服に私が袖を通して手が出ない始末。しかし、笑つてはおられない有り難いご厚意であつた。この時ほど、開拓事業に参加してよかつたと思つたことはない。

三日間、心温まるご厚意に甘えて滞在していたが、私には大事な仕事がつまっているので、団の連絡も兼ねて馬車を仕立ててもらい齊々ちちはる哈爾はるに向かつた。途中、長柄の鎌や銃を持った原住民の自警団の検問に遭い、何度か危機にさらされたが、何とかそれを突破して、九月一日満拓地方事務所にとどり着いたのである。

逃 避

齊々哈爾事務所には、北安時代から知り合ひの飛田所長や田中実総務課長がおられるので、田中課長宅に

世話になることになった。

興安の情勢は全く不明ということで、何とか興安行きの方法はないかと相談したが、日本人の旅行は禁止されているし、単独で行動することは生命が危ないということ、当面自重せざるを得なかった。

何日たつてもちくちく体がかゆい。虱が減らないのである。衣服はすべて新品に取り替えているのにおかしい。よくよく調べて見ると、何と首からつるしていたお守りの紐に、卵が鈴なりについていたのであった。

そのころ、日本人居住者には、八月十五日現在で、居住証を発行し、証書を持っていない者は逮捕されることになっていて、もちろん私は持っていない。違反者を隠している隣組の連帯責任もうんぬん、流し始めた。人間は弱い者だ。いざとなれば、職場の仲間意識などどこへやら、内部から密告の空気が兆し始めた。

一カ月もたっていない。私は社宅から出ることを決意した。行く先は北方百キロの寧年である。そこには満拓の機械農場があり、何とかやっているはずだ。

同行の須藤君は、もともと社宅の住人だが、応召し

ていて解除が遅れて帰宅していたので、気の毒である。早朝、二人は満州服で変装し、須藤君は古着屋、私は豆腐屋で、天秤棒を担いで出発した。

三時間ぐらい歩いて、部落にさしかかった所で、三人組のソ連兵に「ダワイダワイ」と捕まった。万事休す。覚悟はしていたが、身体検査で腕時計と現金を取られただけで無罪放免となった。お守りの袋に入れてあった妻と雅子の写真を見られたときは、これはまずいとドキッとしたが、ニヤッと笑って元に戻したので、ホッとした。単なる物盗りだったのか。

一難去つてまた一難とか。さらに三時間ほど進んで、丘陵地帯を通っていたときであった。二百メートルぐらい前方の谷間で、品物を山ほど積んだ現地人の十台ぐらいの馬車の隊列を、両方の丘の上から、暴徒の群れが襲いかかったのである。阿鼻叫喚、たちまち大乱闘となった。一瞬、目を疑った。これは現実である。こんなことに巻き込まれてはたまらない。荷物も捨てて一目散に逃げた。

どのぐらい走つただろうか。雑木林で一休みしながら

ら考えた。この状態では目指す寧年に向かうのは危険だ。さりとて、今更社宅に戻るわけにもいかない。だが、結局夜に入って齊々哈爾に着き、ひそかに社宅の空き家に忍び込んだのである。

空き家といっても社宅の中である。動くわけにはいかない。そこで考えついたのが、需品倉庫に隠れることだ。倉庫は街中であつて、たくさんあつた物資は略奪されて、今は空き家になつている。生死を共にした須藤君と別れ、一人で倉庫の二階に陣取つた。昼は休み、夜になつて食糧を調達に歩くという生活が一月も続いたろうか。

しかし、これも決して安全ではなかつた。夜になると鋸や斧を持つて、柱や壁板を取りにくる暴民がいる。やがて倉庫は倒されるであらう。

窮すれば通ずだ。幸にも扎蘭屯事務所の人たちが、独身寮に非難してきている。そこに紛れ込むことにした。しかし、これもあくまで隠密の生活で、昼は旧知の河野千秋さんご夫妻の部屋の押し入れに隠れ、夜になつて外で体を慣らすというものであつた。

ソ連軍から割り当てられる使役には進んで参加した。主な作業は、日本の在滿工業設備を解体して、ソ連に転送するのであるが、昂々溪での積み替え作業は厳しいものであつた。ごみ捨て場から缶詰の空缶を掘り出し、そのまま食器として使つたこともあつた。麻袋をかぶつて寒い駅のホームにゴロ寝したこともある。敗戦国民には自由はない。奴隸なのだ。

日本人会の努力で、終戦時、たまたま南滿地方から所用できていて、そのまま足留めされていた人たちが南滿へ転送することとなり、私も滿拓幹部の配慮でこの中に組み入れてもらい、十二月一日、百人ぐらいの人たちと齊々哈爾を後に貨車に乗る。

北安、ハルビンとのろのろと貨車は走り、四日目、ようやく新京本社にたどり着くことができた。

三、家族の避難

手荷物はおむつ

妻の重子は八月九日、雅子、元子の幼い二人の子供と共に、興安の滿拓社宅でソ連の参戦を知つた。

七月に肺炎を患つたが、八月には何とか回復してい

た。夫が応召したので、ひとまず内地へ帰ったらしい話もあったが、内地より満州の方が暮らしやすいといううわさもあり、やがて除隊するであろう夫を、この家で迎えたいという気持ちだったので、そのまま生活をしていった。

社宅では緊張の協議が重ねられ、とにかく、全員十一日に列車で新京に向かって避難することとなった。しかし、十一日は最後の避難列車であり、早朝からソ連機の空襲爆撃もあって、興安駅はパニック状態になっており、身動きのとれない状態であった。

そこで急遽、列車での脱出をあきらめ、徒歩で避難することとし、東京荏原開拓団を経由して、取りあえず洮南^{トウナン}を目指すこととした。時に、男子社員は四本所長以下十五人、家族、婦女子は四十二人であった。

わが家では幼児二人を抱えているので、皆より一足先に列車で出発しようとして、昨日誘ってくれた人がいて、夫不在の心細さからいろいろ迷ったが、やはり社員一同と行動を共にすることとした。

用意した大車には、病弱者、老人、子供と身の回り

品を乗せたが、わが家の身の回り品は、元子のオムツと肌着をできるだけ持つことで精いっぱい。病後の肩には元子を负ぶったひもが重くずっしりとくい込む。稚子は周囲の慌ただしさに、不安そうに袖にすがって離れない。焦燥の出発であった。

その夜は、東京開拓団の本部部落に厄介になったが、当団も、十六の部落に分散する団員、家族九百人を取りまとめ避難させることに、山崎団長以下きり舞いするときであった。

翌十二日、団員の集結状況がはかどらず、団の出発の見通しが立ちにくい情勢にあったので、心ならずも開拓団に別れを告げ、満拓のみ南方に向け出発した。その際、大和部落の一部の団員が合流同行することになった。

農家に泊まりを重ね、道を尋ねながらの行進である。途中、三三五五、単独で避難していた街の人も合流して人数は増えていった。照井夫人が急に産気づいて、男児を出産したため、休養を兼ねて二泊したこともあった。開拓団を出発したところから、隊の前後を徘徊す

る現地人の異様な姿が見られていたが、時に、挑発的に発砲してくることもあった。ある日、山道で休養をとっているときのこと、雅子が「あの花きれいな」と路傍に咲いた花に近寄ろうとした瞬間、ダツダツと狙撃されたときは肝をつぶした。幸い難を免れたが、幼い目には差し当たり弾より花というところか。

十八日になつて来た。かなりの部落に入つて来た。後で分かつたことだが、洮南県柳河鎮まできていたのだ。

匪襲

雨模様の夕暮れ時、予期した最悪の事態がやってきた。妻たちは前後左右を暴民に囲まれていたのである。銃や槍、長い鎌などを持った多数の暴民が喚声をあげて襲撃してきた。とつさに片側の高梁畑に飛び込んだが、彼らも襲いかかってきた。畑のあちらこちらで悲鳴や怒声が起こっている。元子を背負い、雅子の手を引いて走った。そして息を殺して草むらに潜んだ。

どのぐらい時間がたっただろうか。周りは静かになつた。どうやら暴徒は引き揚げたらしい。不思議にも、

元子も雅子も泣き声一つ立てなかつたので助かつた。この時ほど、夫のいない心細さを味わつたことはない。重苦しい夜が明けて、徐々に集まり出して点呼をしたところ、杉本、照井、作田の三家族の姿が見えない。しばらく待つたが探す術もないのであきらめてまた歩き出した。

部落に入り、人影のない土塀の高い農家でやつと一息。食事を終えた時である。パンパンと銃声が起こつた。また暴民かと男子たちは銃を構えて応戦したが、銃声はますます激しくなるばかりである。土塀を挟んで攻防が続く。妻たち女子供は土間に伏せ、ただただ恐怖におのき成り行きを見守るのみである。その中に戦死者が出た。血だらけになって倒れている。また倒れた。もがき苦しんでいる者もいる。弾は少なくなつた。万事休すだ。婦女子に自爆用に渡された手榴弾は、どうしたことか一個も爆発しない。四本所長はついに意を決し、白いハンカチをステッキに結んで土塀の外に振つた。

その時である。ドドツとマンドリン銃を構えて入つ

て来たのは意外にもソ連兵であつた。私たちはソ連兵とは知らずに戦つていたのであつた。しかも相手方にも一人の戦死者があつたのだ。

男子全滅

男子たちは一人、一人身体検査を受け、整列して連行された。女、子供も後に続いた。付近の住民たちは遠巻きにして追尾している。蕎麦畑が続く丘陵にさしかかつたとき、女、子供たちは足止めされた。男子たちの姿が視界から消えたときであつた。パンパン、パンパンと激しい銃声が聞こえた。一瞬不吉な予感が走つた。

しばらくして住民たちがワイワイ騒いで走つてきた。手に手に見覚えのある男子たちの腕時計や衣服をかざしている。慄然とした妻たちは飛んで行くこともできない。ただただ茫然と見守るばかりであつた。それが男子たちとの永遠の別れであつた。

日本が負け戦争が終わつたことも、ソ連兵の身振り、手振りの話で初めて知つた。また歩かされ、一軒家に入れられた。そして夜に入つて、忌まわしい残酷な事

態が発生した。入れ代わり、立ち代わり侵入してきたソ連兵に女たちは反抗する術もなく、次々に引き出さばき言葉もなかつた。

朝がきた。うつろな瞳、虚脱した体、女たちは口数も少ないが、それでも泥道を歩かねばならなかつた。半日ぐらい歩いたろうか。大きな道路に出た。ソ連軍の戦車や装甲車が轟音をたてて走り抜けていく。ああ戦争であつたのだ。

雨が降り、道路はぬかるんで歩きにくい。三歳の女児では一行から遅れがちになる。それでも母の姿を追つてトポトポとついてきた。のどを潤すのに路傍の白く濁つた溜り水も飲んだが、不思議と腹をこわす者はいなかつた。野宿もした。かくして二十三日、興安を脱出してから十三日目、ようやく洮南街に着き、ソ連軍の難民収容所に収容されたのである。

二女の死

難民収容所には、先住者も既に四十人ほどいたが、何かの倉庫跡と思われる建物の土間にアンペラを敷い

ただけのもので、便所も外だし、風呂もない粗末なものであった。

匪賊の襲撃で行方不明になっていた杉本さん、照井さんの家族も憔悴して到着したが、杉本さんはあのとさの乱闘で切られた大腿部が化膿し、蛆もわいている有様であった。

生活は劣悪で、配給されるのは高粱とナスなど少量の野菜と岩塩だけの日々が続いた。こうした状況が三カ月も続けば、当然老人、子供らから衰弱して死者が出る。もちろん棺桶などない。筵などに包んで空き地に埋めた。土饅頭が次々と増えていった。

乳離れの時期にきていた元子にも変調が起りだした。萎えた乳房を吸う力もだんだんに弱っていった。高粱だけの食事では手の打ちようがない。ああ、白米のお粥が欲しい。口移しの日が続いたが、呼吸は細くなっていき、ついに痛恨の日がきた。十月四日、午前十時ごろか。母の腕に抱かれたまま、まだあどけない顔をして、静かに静かに旅立っていった。体が冷たくなった午後、おむつだけは取り替えて筵に包み、野犬

に食われないよう深く深く掘った河原の穴で、永遠の眠りに就いた。享年十カ月。

やがて収容所はソ連軍から中国側の管理に移されたが、待遇は変わりなく、難民たちの衰弱は増えるばかりであった。こうした事態もあり、難民たちの必死の陳情により当局はようやく重い腰を上げ、新京への移送に動き出した。十月八日、客車とは名ばかりの座席もない列車が用意され、百人ほどに膨れ上がった難民は、歓喜の涙で思い出の洮南をたち、途中王府で一泊して十一月十日夢にまでみた新京にたどり着いたのである。

着いた。ようやく着いた。皆抱き合って泣いて喜んだ。駅に降り立った皆を見て、付近の日本人や中国人が変な顔をしてジロジロ眺めている。無理もない。この三月余り風呂にも入っていないし、出発当時の夏物で、ポロポロになったものをままとっており、中にはそれさえなくて、麻袋を腰に巻いた者もいる異様な姿であった。

その夜は難民収容所になっている室町小学校に入っ

た。本社と連絡がとれ、五色街の満拓社宅に移った。本社職員や社宅の奥様方の心温まるもてなして、三カ月ぶりに風呂にも入り、虱退治シラミもかねて、頭髮もサツパリと切つて丸坊主になつた。

畳の上でいただいた白米のお粥の何とおいしかったことか。衣類も供出していただいてサツパリした。

しかし、歓喜もつかの間、久しぶりに寝た布団から起き上がれない者が出た。三カ月に及ぶ艱難辛苦の旅が精神的にも肉体的にも、大きな打撃を与えていたのである。高熱を発して次々に亡くなつた。何たる無残。ようやく新京にたどり着いたというのに。

重子と雅子は、一行の到着を知つて、駆けつけてくれた河野治良さんの進化街の社宅に引き取られた。

四、命ありて

再会

私が新京に着き、本社で最初に聞いたことは、興安の社員が、先月既に新京に到着しているという朗報であつた。しかし、その内容を聞くにつれ愕然とした。五色街の社宅に飛び込んで、「今帰つたよ」と声をか

けると、皆驚いたが声が出ない。周りを見ると床の間に骨箱が数個あり、その前に棺桶が四つも並んでいる。これから葬儀だという。貴方はちょうどよい時に帰つてきた、男子だからすべてを仕切つてくれと言われ、早速進めたが、どこを見ても私の家族の姿が見えない。「さては!!」と半ば観念して、棺を送り出した後、覚悟して家族のことを聞き、河野宅に知っていることを知つてホツとした。夕暮れ迫る街を河野家に走つた。

そのころ、妻も雅子も同僚と同じように、憔悴の極みにあつた。雅子が肺炎となり、その看病の疲れもあつてか、妻も肺炎にかかり、肺炎の名医といわれた浜田医師も、既に時間の問題だと匙を投げて帰られたところであつた。すぐに二階が上がつて会いたかつたが、突然現れたのでは、ショック死の危険があるという河野君の忠告でしばらく様子を見ることにした。しかし、焦燥は募るばかり。意を決して二階へ上つた。

「オイッ、今帰つたよ」と声をかけたが、妻の目は開かない。耳も聞こえないらしい。雅子が異様な目をして見据えている。恐る恐る手を握つてやるとかすか

に握り返す「反応があった。「ようし!!大丈夫だ。生きてる」止めどなく熱い涙が流れた。それにしても何と哀れな姿であることよ。骨と皮だけの細い体に坊主頭。骸骨とはこのことか。よくぞ生きていたものである。奇跡的にも二人は助かった。親子三人の気力の勝利だ。

口が利けるようになって、妻が最初に言った言葉は、「元子が……」であった。後は言葉にならなかつた。

生きるために

厳寒の中、昭和二十一年の年が明けた。大晦日に亡くなった五色街社宅の二人の少女の葬儀を元旦は避けて二日に済ませた。

新京でも日本人狩りが行われていた。そこで私は隣組の人たちと相談して、「上野進」と改名したのだが、それが帰国後、笑えぬエピソードになる。三歳の雅子に人に聞かれたら、「あの人はよそのおじさんだよ」と答えるように教えたためである。ソ連軍の逮捕を逃れるために改名し、雅子に教えていたのが何かの機会にしゃべって「お宅は再婚ですか」と問われ、妻は赤

面して私たちの結婚写真を持って、隣近所に釈明して歩いたのであった。

新京に流れ込んだ難民は数万に及んだ。在住の日本人は家財の売り食い何とかしのいでいるが、避難民は何かして働かなければ生きていかれない。

私が最初にやったのは燃料屋だ。鉄道線路に落ちていた石炭を拾い集めて、市内の人に売るのである。雪の中の小さな粒まで探した。重労働であったが結構よい稼ぎになった。病み上がりの妻も一緒に働いた。夜明けの線路にいるところを、中国の公安に狙撃され捕まって、交番で土下座させられ、銃床でなぐられたときは生きた心地がしなかつた。

野菜屋もやった。焼酎売りは友を集めての試飲の量が多過ぎて赤字になった。野菜の売上金を持って白山公園を通っているとき、ソ連兵に襲われ取っ組み合いの大乱闘になったが、折よく警邏中の憲兵に救われたこともあった。

暖かくなって郊外の湿地で摘み取ったセリを市中に売ったのもヒットの一つであり、町に屋台を出してみ

つ豆屋「羽衣」を開店し、ちょっとした人気にもなっていた。

そうこうしているうちに、待望の引き揚げが始まった。

昭和二十一年七月二十一日、町ごとに編成され、少し詰めめの無蓋車で思ひ出多い新京を後にしたが、石炭ならぬ現金という燃料を補給しなければ、なかなか前に進まないのに驚いた。

錦西で十日間止められた上、コロ島から乗船した。

このとき、私は他人の「上野」姓からようやく本名の「田中」姓に戻ったのであった。

博多港に着いたが、赤痢患者が出たため、上陸できず佐世保に回され、二十日間も沖で待機、八月二十五日ようやく上陸を許されたのであった。

五、引揚げ再出発

焦土の広島で乗り換え、郷里三次で両親、兄弟と再会した後、直ちに上京。すべては新規の再出発であった。幸運にも百九十分の一の確率で、引揚者住宅に当選し、まずは住居は確保できた。

農林省から広島県駐在の農林事務官はどうかとの話があったが、あの状況では住宅の確保に不安があったので、ついに任官を断念した。

満拓の北安事務所長をしておられた佐藤秀堂さんと会社を作ったが、結局は武士の商法。商社会社も玩具製造会社も失敗して負債だけが残った。その間、板橋区引揚者会長をしたり、東京都連の事務局長を引き受けて、引揚者運動にも参加した。しかし経済的には楽ではなかった。電車賃がなく板橋の坂下から丸の内まで歩いたこともあった。妻は質屋に通う質草の工面にも苦労したようであった。

終生の仕事となった農林漁業団体役員共済組合の設立に参加したときは、既に私も四十歳を過ぎていた。時は過ぎ、はや終戦後五十年、既に八十路を過ぎたが、敗戦の際、あの大興安嶺の地下壕陣地で、胸に秘めた平和への誓いは今なお鮮明である。

【執筆者の横顔】

田中房春氏は法政大学政治経済科を卒業し、昭和十

三年十二月逋信省の事務官として勤務していたが渡満を決意して辞し、十二月十日満州拓殖公社社員として着任、開拓業務を担当し、全満州の各開拓事務所に転属。本社勤務中に結婚し二人の子女を儲けた。

昭和二十年五月十二日に召集令状をうけ、大興安嶺の免渡河の部隊に入営したが、小銃は与えられず、専ら爆薬を抱いて匍匐前進して敵の戦車の下に突っ込む訓練ばかりであった。

昭和二十年八月十六日午後三時、時ならぬ伝令がもたらしたのは、あの悲惨きわまる日本敗戦の連絡だった。一同みな泣いた。また号泣した。これから日本はどうなるのであろうかと、そして家族は今どうしているのであろうかと頭によぎるものがあつた。

おもむろに田中氏は言った。「今まで日本は、皇国史観によつて、八紘一宇の世界に君臨しようとしたが、これからは、武力を捨てて、文化をもつて、平和な世界の実現に貢献する使命ではなからうか」と。

大興安嶺の免渡河部隊から、人跡未踏の大森林地帯を道なき道を肅肅として歩き続け、ソ連軍の射撃に幾

度となくおびやかされ、飲食何も無く、芋も、草の根も食しながらの生活。ようやく北安に着き、ハルビンから新京本社にたどり着き、妻の重子さんと再会。二人の幼子を抱いてきた妻の労をねぎらつて、夫婦抱き合つて喜びの涙である。

新京の難民生活は、家族ともどもの苦勞は生きる望みを賭けて苦勞はものともせずには働きつらぬいた。

八月二十五日、家族共々博多港に上陸した。終戦五十年、日本敗戦に遭つたときの田中氏は、今後、日本の生きる道を「国際善隣の天命」ときとりを開いたことを実践している田中房春翁である。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)